

# 六億ドルの黒字に 昨年の貿易収支

	米国	英国	その他の EC諸国	その他の OECD諸国	日本	総額
1965	6,045	619	514	300	230	8,633
1966	7,204	673	583	232	253	10,072
1967	7,951	649	597	269	305	10,872
1968	9,048	696	662	289	360	12,358
1969	10,243	791	787	346	496	14,130
1970	9,917	738	815	406	582	13,952
1971	10,951	837	935	423	803	15,618
1972	12,878	950	1,149	528	1,071	18,668
1973	16,502	1,005	1,476	630	1,020	23,325
1974	21,357	1,126	1,920	802	1,430	31,692
1975	23,559	1,222	2,074	885	1,205	34,635
1976	25,661	1,153	2,028		1,524	37,391

	米国	英国	その他の EC諸国	その他の OECD諸国	日本	総額
1965	5,033	1,185	636	241	317	8,767
1966	6,235	1,132	645	280	395	10,325
1967	7,332	1,178	689	246	574	11,420
1968	9,230	1,226	762	289	608	13,624
1969	10,551	1,113	855	318	626	14,871
1970	10,900	1,501	1,206	445	813	16,820
1971	12,025	1,395	1,109	445	831	17,818
1972	13,974	1,385	1,144	463	965	20,150
1973	17,129	1,604	1,581	544	1,814	25,421
1974	21,400	1,929	2,175	788	2,231	32,441
1975	21,653	1,789	2,347	637	2,122	33,104
1976	25,783	1,848	2,647		2,391	38,028

カナダ統計局によると、昨年のカナダの貿易額は輸出を中心に大幅に伸び、往復で七百五十四億一千九百万ドルに達した。これは一九七五年の六百六十七億三千九百万ドルを七十六億余ドルも上回る。貿易収支も、七五年の十五億三千七百万ドルの黒字となった。また昨年三十三億二千七百万ドル(往復)と前年より三億万余ドルも落ち込んだ対日貿易も、三十九億一千五百万ドルと大幅に増えた。

まず、昨年の輸出総額は三百八十億二千八百百万ドルで、前年の三百三十一億四百万ドルより一四・八パーセント増加した。これは、原油(前年比七億六千五百万ドル減)、石油関連製品、小麦などの輸出が減少した反面、天然ガス(前年比五億二千五百万ドル増)、木材(同四億六千五百万ドル増)、新聞紙(二億三千五百万ドル増)などの輸出が好調だった

ためである。

国別では、米国への輸出が前年の二百十六億五千三百万ドルから一九パーセント増の二百五十七億八千三百万ドルに達し、全輸出額の六七・八パーセント(七五年は六五・四パーセント)を占めた。対米輸出で最も大きく伸びたのは自動車および同部品で、前年に比べて十七億八千万ドルも増えた。

第二位の日本に対する輸出は二十三億九千万ドルで、前年より二億八千万ドル(二二・六パーセント)増。これは、小麦、大麦、石炭、木材、バルブなどの輸出が大きく伸びたことによる。

一方、輸入は総額で前年比七・九パーセント増の三百七十三億九千万ドル。自動車および同部品、化学品、機械類、消費財などの増加が目立った。

国別では、対米輸入が二百五十六億六千七百万ドルで、前年比八・九パーセントの伸び。輸入総額に占める対米輸入のシェアも、七五年の六八・〇パーセントから六八・六パーセントへ増加した。

七五年に前年比一五・六パーセントも落ちた対日輸入は、七六年に二一・四パーセントも伸びて十五億ドルを越えた。これは、主に、自動車、テレビ、通信機器などの輸入増による。

## もつと原子力発電に力を

### オンタリオ・ハイドロ総裁が強調

オンタリオ州は、一九八〇年代、一九九〇年代の中心的発電システムとして、経済性、安全性、生産性などの点できわめてすぐれているカナダのカンドウ型原子炉を活用すべきだ——カナダ・オンタリオ州の電力・水道公社オンタリオ・ハイドロのロバート・テイラー総裁は、このほど、将来の電力不足を避けるためには、原子力発電所をもつと建設すべきであると発言した。同総裁は原子力発電の効率だけでなく、環境問題や安全性などについてもふれている。以下は発言の要旨——。

の原子炉(それぞれ出力五十万キロワット)のうち、昨年は三基が稼働率九〇パーセントを越えた。一基は途中になってから稼働したが、それでも四基の平均稼働率は八七パーセントを記録した。因みに、北アメリカにある火力発電所の稼働率は七四パーセントであった。ピカリングの四基のうち、二基は世界各地にある同規模の原子炉六十七基のいずれよりもすぐれた実績を示した。

カナダの原子力発電所では、過去十五年間、人命にかかわる事故はいかなる原因であれ、一件も発生していない。放射性もしくはその他の原因で不具になった例もない。職員が職を離れなければならぬような放射能事故も全く発生していない。原子力発電所の近くや内部で、一般の人がケガをしたということもない。

コストについてはどうだろうか。ピカリングで達成されたエネルギー総単価はオンタリオ・ハイドロが運営する近代的火力発電所のエネルギー単価の半分にすぎない。

つまり、燃料(ウラン)も技術(カンドウ炉)もあり、また安全性、経済性も実証済みである。あとは原子力を利用する意志だけだ。一九八五年以後は、オンタリオの電力需要のうち、その三分の二を原子力でまかないたい、というのがオンタリオ・ハイドロの考えである。

オンタリオ州にとって、一九八〇年、一九九〇年に必要なだけの自己依存度を確保するための十分な電力需要を確保するには、原子力だけしか選択の道はない。これは、燃料の入手可能性と価格の点からだけでなく、環境への影響が少なく、また化石燃料をウラニウムでは達成できない諸目的のために保存できることから言えることである。われわれの裏庭にはウランがあり、実証済みの転換炉も手中にある。

カナダの原子力発電計画は、ひとつの成功物語であり、おそらくわが国の歴史の中で最大の技術的偉業といえよう。カンドウ型原子炉は、今や、すばらしい実績を取った先駆的存在である。

例えば、ピカリング発電所にある四基